

情報の民主化は社会をどこへ導くのか

——人類総メディア時代の自由、注意、そして未完成の公共空間

山口真一 国際大学 GLOCOM 主幹研究員・教授

1—人類総メディア時代に起きつつあること

私たちはいま、かつて経験したことのない情報環境の中に生きている。SNSとスマートフォンの普及によって、誰もが発信者となり、個人の言葉や映像が瞬時に社会へ届く「人類総メディア時代」が現実のものとなった。これは単なる技術革新ではない。情報の流れ方そのものが変わり、社会の意思形成のあり方が大きく書き換えられたという点で、歴史的な転換である。

この変化がもたらした恩恵は小さくない。従来のマスメディアでは拾われにくかった声が可視化され、地域や立場、属性に縛られない発信が可能になった。社会問題の告発や、当事者による経験の共有が広がり、公共的議論の裾野は確実に広がった。情報発信の自由が拡張されたこと自体は、民主主義にとって本来、歓迎すべき出来事である。

一方で、この新しい情報環境は、同時に強い歪み^{ひず}も生み出している。その象徴が、フェイク情報の拡散である。研究が示すように、事実に基づく情報よりも、虚偽や誇張を含む情報のほうが、はるかに速く、広く拡散されやすい。驚きや怒り、不安といった感情を強く刺激する情報ほど、人々の注意を集めやすいからだ。ここには個々人の善悪を超えた、情報流通の構造的な問題がある。

フェイク情報に騙^{だま}されるのは、「一部のリテラシーの低い人」だと思われがちである。しかし、実際のデータはそれとは異なる姿を示している。私の研究では、実際に拡散したフェイク情報を見聞きした人のうち、「これは誤りだ」と適切に判断できていた人は約15%にとどまっていた。半数以上は「正しい」と信じており、残りは判断を留保していた。フェイク情報は、決して一部の人だけを騙しているわけではない。

人類総メディア時代の歪みは、情報を受け取る側だけに現れるものではない。発信する側の行動にも、同じ構造的な偏りが生じている。SNSでは、冷静で慎重な意見よりも、断定的で攻撃的な言葉のほうが目立ちやすい。その中には、特定の相手を単純化し、人格ごと切り取るような言葉も含まれる。ネット上の誹^{ひぼう}謗中傷が大きな問題となっているのは、人々の資質が急に変わったからではなく、攻撃的な表現ほど可視化されやすい環境が整ってしまったからである。その結果、あたかも社会全体が過激化しているかのような印象が生まれる。しかし実際には、声の大きさと意見の分布は一致しない。

私が約3000人を対象に行った調査では、このズレが明確に確認されている。憲法改正に関する賛否を7段階で尋ねたところ、「非常に賛成」あるいは「絶対に反対」といった強い立場を取る人は、それぞれ約7%にすぎなかった。ところが、同じ人々のSNS投稿回数を分析すると、これらの層が全体の投稿

の約半分を占めていたのである。中庸な意見を持つ人が多数派であっても、SNS上では極端な意見が支配的に映る構造がここにある。

さらに近年は、生成AIの急速な普及によって、この状況が一段と複雑化している。文章、画像、動画といったコンテンツを、専門的な技能がなくても容易に生成できるようになった結果、「それらしく見える情報」を作るコストはほぼゼロに近づいた。もはや、怪しい点を注意深く探すといった従来型の真偽判断だけでは追いつかない局面に入っている。

重要なのは、これらの現象を単なるモラルの低下や技術の暴走として片づけないことである。発信の自由が一気に拡張された一方で、それを支える制度や規範、設計思想が追いついていない。その結果として、フェイク情報や極端な意見が目立つという「自由の副作用」が前景化しているにすぎない。人類総メディア時代の混乱は、情報社会が新たな段階へ移行する過程で避けがたく生じている現象なのである。

では、この情報社会はどこから来て、どこへ向かおうとしているのか。現在の混沌を理解するためには、情報空間を歴史の流れの中に位置づけ直す必要がある。

2 情報社会はどこから来たのか ― 国家化・産業化・情報化という三つの段階

フェイク情報や誹謗中傷が目立つ現代の情報環境を前にすると、私たちはしばしば「社会が壊れてしまったもう修復できないのではないか」という感覚にとらわれる。しかし、こうした混乱を短期的な現象としてだけ捉えようと、必要以上に悲観的な見方に引きずられやすい。現在の状況を理解するためには、社会

がどのような価値を中心に組み替えられてきたのかを、もう少し長い時間軸で捉え直す必要がある。

近代以降の社会を振り返ると、私たちはこれまでに少なくとも三つの大きな転換点を経験してきた。国家が社会の中心に据えられた時代、経済が中心になった時代、そして現在進行形で進む情報が中心になりつつある時代である。それぞれの時代には、当時の人々にとって合理的で説得力のある価値観があり、社会はその価値を軸に再編されてきた。

(1) 力が国家に集中していた社会

近代の初期、特に16世紀以降のヨーロッパ社会では、「国家」が圧倒的な存在感を持つようになった。銃火器の普及によって戦争のあり方が変化し、軍事力の差がそのまま国家の存亡を左右するようになると、社会の関心や資源は一斉に国家へと集中した。徴税や常備軍の整備、統治の効率化が進み、強い主権国家が形成されていく。

この時代において、何が正しく、何が望ましいかという判断基準は、「国家の利益」によって測られていた。情報もまた、自由に流通するものではなく、統治のために管理・統制される対象であった。国家を強く保つことが、安全と秩序をもたらすと信じられていたからである。

重要なのは、国家がすべてだったこの時代も、永続しなかったという点である。社会の中心に据えられた価値は、やがて別の価値によって相対化されていく。

(2) 価値が経済に集約された社会

18世紀後半から始まった産業化は、社会の駆動力を国家から経済へと移し替えた。産業革命によって生産が拡大し、工業化と都市化が進むなかで、「どれだけ富を生み出せるか」が社会の評価軸となっていく。経済成長は、進歩や成功の象徴として語られるようになった。

この時代には、価値観の大きな転換も起きた。市場での成果が重視されるようになり、努力と工夫によって成功することが称賛される。経済の自由は、多くの人に機会と希望を与え、社会の民主化を推し進める役割を果たした。

しかし同時に、経済がすべての判断基準になることの影も現れる。何が正しいか、何が望ましいかは、「儲かるか」「成長につながるか」で測られがちになり、文化や教育、福祉といった領域も、経済的な効率によって評価されるようになった。経済が社会を豊かにした一方で、価値の多様性はしだいに押し縮められていった。

それでも当時の人々にとって経済中心の社会は合理的であり、疑われにくい前提であった。国家の時代に「戦争に勝つこと」が最優先だったように、産業化の時代には「経済を伸ばすこと」が当然の目標とされていたのである。

(3) 影響力が情報へと移行する社会

国家がすべてだった時代、経済がすべてになった時代を経て、私たちはいま第三の転換点に立っている。社会の中心に据えられつつあるのは、情報である。ここでいう情報とは、単なる知識やデータにとどまらない。人々の認識や行動に影響を与え、社会を動かす力そのものを含んでいる。

インターネットとSNSの普及によって、情報の流通コストは劇的に下がり、発信の主体は一気に拡張された。かつては国家や大企業、マスメディアが担っていた発信力が、個人の手にまで広がったのである。当初、この変化は歓迎された。情報の民主化は、多様な声を可視化し、社会をより開かれたものにすると期待された。

しかし、情報が社会の中心に近づくにつれて、これまでとは異なる不安定さも表面化している。情報の自由が先行する一方で、それをどう扱い、どう調整するかというルールや規範は、まだ十分に整っていない。フェイク情報や極端な意見が目立つのは、情報社会が「失敗している」からではなく、「未完成」であることの表れだと考えることもできる。

国家の時代にも、経済の時代にも、価値が一極集中する過程では混乱や副作用が生じてきた。情報が中心になりつつある現在も、その例外ではない。重要なのは、この転換期をどう位置づけ、どのように乗り越えていくかである。

3 自由がもたらした光と影

第1節で見たように、現代の情報空間では、フェイク情報や極端な意見が目立ちやすい。第2節では、

それを情報社会の「未完成」という文脈で位置づけた。では、なぜ情報が社会の中心に近づく、このような現象が繰り返し生じるのか。答えの鍵は、「自由」と「注意」の関係にある。

情報社会における最大の変化は、発信の自由が一気に拡張された点にある。誰もが発信できるようになったことで、表現の機会は飛躍的に増えた。これは間違いなく社会の前進である。しかし同時に、情報が爆発的に増えたことで、別の希少資源が浮かび上がった。それが、人々の注意である。

情報が不足していた時代には、価値は情報そのものにあった。ところが、情報が過剰になると、何が重要かを選び取ることのほうが難しくなる。人々が一日に触れられる情報量には限界があり、すべてを等しく受け止めることはできない。その結果、注意を集められるかどうか、情報の価値を左右し、さらには収益につながるという社会が生まれた。このような構造は、一般に「アテンション・エコノミー（注意経済）」と呼ばれている。

この構造のもとでは、冷静で複雑な説明よりも、短く、強く、感情を動かす情報が有利になる。怒りや恐怖、驚きといった感情は、注意を引きつけやすい。フェイク情報や断定的な言説が広まりやすいのは、内容の正確さよりも、注意を集められるかどうかの評価軸になっているからである。

この論理が選り取り、誤った情報だけではない。相手の人格を切り取り、嘲笑や断定で押し切るような言葉もまた、注意を集めやすい。誹謗中傷や炎上が頻発するのは、社会全体が突然冷酷になったからではない。短く、強く、対立を明確にする表現ほど反応が返りやすく、可視化されやすい環境ができてしまった結果である。こうして言葉の攻撃性が「目立つ」だけでなく、模倣され、連鎖し、公共空間の空気を少しずつ荒らしていく。

こうした傾向は、特定の発信者の意図だけで生まれているわけではない。多くの情報サービスは、利用者の関心に応じて情報を提示することで利便性を高めてきた。その結果として、「反応を得やすい情報」が優先される傾向が強まったのである。利便性と引き換えに、情報の選別基準が静かに変わっていったと言える。

発信の自由が拡張されたことは、同時に競争の激化も意味した。注目を集めなければ、情報は存在しないも同然になる。その環境では、穏健で中庸な意見よりも、強い主張や対立的な言説のほうが目立ちやすい。第1節で示したように、極端な意見を持つ人ほど投稿頻度が高くなる傾向も、この構造と無関係ではない。

生成AIの登場は、この状況をさらに加速させている。文章や画像、映像を低コストで大量に生み出せるようになったことで、情報の供給は事実上、無限に近づいた。注意という限られた資源をめぐる競争は、いっそう激しくなる。真偽を確かめる前に、次の情報が流れてくるという感覚が常態化しつつある。

重要なのは、この構造が「悪意ある行為者」だけによって支えられているわけではない点である。多くの人は、注目を集めようとしてフェイクを広めているわけではない。利便さや楽しさ、共感を求める日常的な行動の積み重ねが、結果として歪んだ情報環境を生み出している。だからこそ、単純な善悪論では解決できない。

自由がもたらした光と影は、切り離すことができない。発信の自由は創造性を解き放つ一方で、注意をめぐる競争を過熱させる。情報社会の問題は、自由が過剰になったから生じているのではない。自由を前提とした社会にふさわしい調整の仕組みが、まだ十分に整っていないことにある。

4 民主化は混乱を伴う

(1) 三つの時代に共通する「力の民主化」

国家がすべてだった時代、経済がすべてになった時代、そして情報がすべてになりつつある時代。一見すると、これらはまったく異なる社会のように見える。しかし三つの時代を貫いて共通する特徴がある。それは、「力の民主化」と、それに伴う混乱である。

国家化の時代には、軍事力が一部の特権的な戦士の手から離れ、多くの人々が戦争に動員されるようになった。産業化の時代には、経済活動が身分や家柄から切り離され、市場に参加すれば誰もが富を得られる可能性が開かれた。そして情報化の時代には、発信力や影響力が国家や大企業、マスメディアだけでなく、個人の手にまで広がった。閉ざされていた力が解放され、多くの人が社会の担い手になる。民主化は、社会を前に進める原動力であった。

この点で、情報社会の本質は「自由が増えた」ことにある。誰もが発信できるという事実は、公共空間を開いた。第1節で述べたように、それは民主主義にとって本来、歓迎すべき価値である。

(2) 民主化はなぜ混乱を生むのか

しかし同時に、民主化は混乱も生み出してきた。軍事力が拡散すれば戦争は激化し、力を背景とした略

奪も横行する。経済活動が自由化されれば格差や競争の過熱が生まれ、環境問題や労働問題が顕在化した。情報が自由に流通すれば、真実と虚構が入り混じり、声の大きさが内容を凌駕する場面が増える。力が集中していた時代にも問題はあったが、力が分散した時代には、別の種類の不安定さが現れるのである。

重要なのは、これらの混乱が「予想外の事故」ではなかった点だ。民主化が進めば、それをどう扱うかというルールや文化が追いつかない期間が必ず生じる。国家化の初期には統治の制度が未整備であり、産業化の初期には労働や市場のルールが追いつかなかった。同じことが、情報化の初期段階で起きていると考えることもできる。

フェイク情報や誹謗中傷は、その混乱の一部として現れている。誰もが発信できるようになった一方で、情報の信頼性をどう担保するか、社会としての合意はまだ十分に形成されていない。だからこそ、情報環境は不安定に見え、悲観的な印象を与えやすい。

(3) 「止める」のではなく、「追いつかせろ」

だが、歴史を振り返れば、混乱は永遠には続かなかった。国家も、経済も、一定の時間を経て制度や価値観が調整され、社会は新たな均衡点を見いだしてきた。民主化そのものが失敗だったのではない。民主化に見合ったルールや文化を整えるまでに時間がかかったのである。

この視点に立てば、現在の課題も、完全に新しいものではない。情報という力が民主化された結果として生じている混乱を、私たちはどう受け止め、どう乗り越えるのか。問われているのは、民主化を止める

ことではなく、民主化と共存できる仕組みと態度を育てることである。

そのためには、規制か自由かという二項対立を超える必要がある。表現の自由を守りつつ、公共空間としての情報環境を維持するには、制度と設計、そして社会的規範の更新が欠かせない。情報社会が未完成である以上、私たちの側も「完成形」を求めるのではなく、調整を続ける姿勢が必要になる。

5 不完全な情報環境と、社会が踏みとどまる条件

(1) 完璧な情報検証は、もはや前提にできない

情報をめぐる問題が議論されるとき、「正しい情報を確認すればよい」「一次情報に当たればよい」という結論に収斂^{しうれん}しがちである。出典を確かめ、複数の情報源を照合し、裏を取る。こうした姿勢が重要であることに異論はない。

しかし、現代の情報環境において、完璧な情報検証を日常の前提として組み込むことは難しい。これは人々が不誠実になったからでも、注意深さを失ったからでもない。情報環境そのものが、そもそも完全な検証を想定して設計されていないからである。

第一に、情報の量が多すぎる。私たちは起きている間じゅう、途切れることなく情報に接している。すべての情報を同じ密度で検証することは、物理的に不可能である。第二に、速度の問題がある。誤った情報や誇張された言説は、正確な説明よりも速く広がり、訂正はどうしても遅れ、しかも届きにくい。第三

に、情報は文字だけでなく、映像や音声として「体験」に近い形で入ってくる。体験として刻まれた印象は、後から訂正されても簡単には上書きされない。第四に、検証の手段そのものも揺らいでいる。調べたつもりでも、同じ誤情報や類似の主張に再び行き当たり、かえって誤った理解が強化されることすらある。このような環境では、「正しさ」を常に見抜く能力を個人に求めること自体が現実的ではない。求められているのは、完璧な検証ではなく、不完全な情報環境の中で判断をどこに置くかという姿勢である。結論を急がず、分らないことを分らないままにし、拡散しないという選択肢を持つこと。それが、現実的な判断の置き方になる。

(2) 他者を尊重するという基本

情報の問題は、真偽の判断だけにとどまらない。もう一つ見落としてはならないのが、表現のあり方そのものが人と人との関係に与える影響である。

現代の情報空間では、短く、断定的で、感情を強く刺激する言葉ほど目立ちやすい。こうした言葉には、誤った情報だけでなく、相手を単純化し、人格ごと切り取るような表現も含まれる。

画面の向こうでは、相手の生活や感情、置かれている状況は見えにくい。短い言葉や断片的な映像だけが切り取られ、文脈は省かれる。その結果、相手は「考えを持つ人」ではなく、「ある立場を代表する存在」や「対立する側の象徴」として認識されやすくなる。誤った情報や一部の発言を前提に、相手のすべてが固定的に理解されてしまう。

重要なのは、こうした単純化が必ずしも悪意から生じるわけではない点である。情報が速く流れ、判断を急がされる環境では、誰もが無意識のうちに相手を単純化する。限られた情報で理解しようとするれば、複雑な人間像を維持することは難しい。だがその結果、訂正や説明は対話ではなく、押し付けや攻撃になりやすくなる。誤った情報を正そうとする行為が、かえって関係を壊す場面が生まれるのは、このためである。

ここで問われているのは、表現の自由を手放すことではない。自由な表現が前提となる社会で、関係を壊しきらない言葉の使い方をどう維持するかである。

(3) 制度・技術・教育による社会的な支え

こうした状況を前にすると、「結局は一人ひとりの判断にかかっている」という言葉が聞かれる。しかしそれは現実的ではない。不完全な情報環境の中で、常に冷静で適切な判断を下し続けることを個人に求めるのは現実的ではない。

社会が踏みとどまるためには、制度・技術・教育が同時に機能することが欠かせない。いずれか一つだけで、この情報環境を支えることはできない。

まず制度の役割は、誤った前提や極端な言説が社会全体に固定されてしまう前に、修正の余地を残す最低限の枠組みを用意する点にある。ここで求められているのは、正しさを一方的に決めることではない。誤情報や誇張、人格を攻撃する表現が、公共空間を支配しきってしまう前に、歯止めをかけることである。

技術の役割は、人間の判断を置き換えることではなく、判断の負荷を下げることにある。情報の真偽をすべて個人に委ねるのではなく、注意喚起の表示、拡散の設計、反応を即座に促さない仕組みなどを通じて、立ち止まるきっかけを環境として組み込む。技術はフェイクや攻撃的表現を増幅させる側面を持つが、同時に、それらが無制限に広がるのを和らげる可能性も持っている。重要なのは、効率や利便性だけでなく、公共空間としての健全性を意識した設計がなされているかどうかである。

教育の役割は、誤った情報や過激な言葉に触れたときに、すぐに結論を固定せず、後から判断を置き直せる態度を育てることにある。フェイク情報に対しても、誹謗中傷や極端な表現に対しても、「乗らない」「拡散しない」「距離を取る」という選択肢を持てるかどうかが重要になる。教育とは、知識の伝達だけでなく、不確実な情報環境とどう向き合うかという姿勢を共有する営みでもある。

この三つは、どれか一つだけでは機能しない。制度だけを強めれば、表現の自由との緊張が生まれる。技術だけに任せれば、設計の意図が見えにくくなる。教育だけを重視すれば、再び個人責任論に戻ってしまう。だからこそ、社会全体で判断を支える環境を重ねていくという発想が必要になる。

社会の強さとは、誤りをしないことではない。誤りを抱えたまま、修正を続けられる点にある。不完全な判断が積み重なっても、致命的な形で固定されないようにする。その条件を整え続けることが、現代の情報社会における現実的な選択である。

6—変化はまだ始まったばかりである

ここまで述べてきた議論は、いま目の前で起きている問題への対処に見えるかもしれない。しかし視点を少し引いてみれば、私たちはまだ大きな変化の初期段階に立っている可能性が高い。

産業革命が始まった頃、人々はおそらく自分たちがとてつもない変化の只中にいると感じていたはずだ。工場の煙突から黒い煙が立ちのぼり、生産量は増え、都市は急速に膨張していく。「世界が一気に変わっている」という感覚は、ごく自然だっただろう。だが後世の統計から振り返れば、その時点の変化は長い歴史の中ではまだ入口にすぎなかった。産業革命から半世紀が経っていても、工業生産や資源消費は後のピークと比べれば桁違いに小さい。人々が「劇的だ」と感じていた変化は、実は序章だったのである。

情報社会も、これと似た位置にあるのかもしれない。インターネットの本格的な普及から数十年、生成AIが一般に使われ始めてからはまだ数年しか経っていない。それでも私たちが「情報過多」を強く実感するのは、情報量の絶対値よりも増え方が急で、情報が生活のあらゆる場面に入り込み、判断の前提を揺さぶっているからである。歴史のスパンで見れば、現在「ビッグデータ」と呼んでいるものも、将来から振り返ればごく小さな段階に見える可能性が高い。変化は、むしろこれから本格化する。

厄介なのは、その変化が単に情報量の増加にとどまらない点である。いま起きているのは、情報が「読むもの」から「感じるもの」へと性質を変えつつあるという変化だ。文章や静止画に加えて、映像や音声は短時間で提示され、体験として刻まれる。体験として入ってきた情報は、後から訂正を読んでも簡単には上書きされない。理解の誤りではなく、記憶の手触りとして残ってしまうからである。情報空間が体験

を媒介するようになるほど、誤った前提が固定されるリスクは高まる。

この流れは、没入型のサービスや仮想空間の広がりによって、さらに強まるだろう。画面越しに眺める情報とは異なり、空間の中に入り込み、他者と同じ場にいる感覚を伴う体験は、出来事そのものとして記憶される。そこに不正確な要素が含まれていた場合でも、人はそれを「聞いた話」ではなく「経験した現実」に近い形で受け取ってしまう可能性がある。問題は悪意の有無ではない。表現の技術が進化し、体験の説得力が増すほど、人間の認知の弱点がより直接的に突かれやすくなる。

さらに、この先の変化は、人間が情報を受け取るだけの問題では終わらない。すでにAIは、人間の指示を受けて作業を行う段階を超え、別のAIが生み出した結果を基に改良を重ねる局面に入りつつある。将来的には、設計や調整の一部が人間の理解や合意を待たずに進んでいく場面も増えるだろう。また、人が考えていることや感じていることを、言葉を介さずに直接伝える技術の研究も進められている。もしそれが実用化されれば、コミュニケーションはこれまでとは質的に異なるものになる。

このような環境では、コミュニケーションの速度と密度はさらに高まり、考えながら言葉を選ぶ余地はいつそう縮小する。反応は即座に返り、沈黙や迷いは「遅さ」として可視化される。結果として、慎重な表現よりも、分かりやすく強い表現が選ばれやすくなる。感情のやり取りは過熱し、共鳴は起きやすくなる一方で、理由や背景が共有されないまま判断が固定される場面も増える。その先にあるのは、誤った情報の拡散だけではない。攻撃的な言葉の常態化や、相手を人間として扱う感覚の希薄化、関係の断絶である。

この未来を前にして必要なのは、情報を遮断することでも、変化を止めることでもない。変化が避けら

れないとしたとき、どのような判断の置き方を社会に残すのかである。すぐに反応しない自由、「分からない」と言う余地、意見を保留する権利。そうした「遅さ」を許容できるかどうか、これからの対話の質、ひいては人と人との関係を左右する。個人の心がけだけでなく、制度・技術・教育の三つの面から、その遅さを支える条件を整える必要がある。

変化が激しいからこそ、急いで答えを出すことが正解とは限らない。情報が体験へと近づき、コミュニケーションが加速する時代には、判断を急がない態度そのものが、社会が踏みとどまるための備えになる。社会の方向は、いま下される一つひとつの小さな選択の延長線上にある。

【参考文献】

- [1] Vosoughi, S., Roy, D., & Aral, S. (2018) "The spread of true and false news online," *Science*, 359(6380): 1146-1151.
- [2] Yamaguchi, S. (2023) "Why are there so many extreme opinions online?: An empirical, comparative analysis of Japan, Korea and the USA," *Online Information Review*, 47(1): 1-19.
- [3] Yamaguchi, S., Oshima, H., Watanabe, T., Osaka, Y., Tanihara, T., Inoue, E., & Tanabe, S. (2025) "An analysis of literacy differences related to the identification and dissemination of misinformation in Japan," *Global Knowledge, Memory and Communication*, 74(11): 121-139.



GLOCOMウェブサイトにて、全文ダウンロードいただけます。

印刷版は、Amazon.co.jpにてご購入いただけます。



<https://www.glocom.ac.jp/publicity/chijo/11795>

智場 #125

情報社会研究のポリログ — AI、ガバナンス、智の実装

責任編集	伊藤 将人、小林 奈穂
監修	砂田 薫
編集・制作進行	武田 友希
発行人	松山 良一
発行日	2026年7月9日
発行所	国際大学グローバル・コミュニケーション・センター (GLOCOM) 〒106-0032 東京都港区六本木6-15-21 ハークス六本木ビル 2F URL https://www.glocom.ac.jp/ TEL 03-5411-6677 E-mail inquiry-glocom@glocom.ac.jp
印刷・製本	株式会社 紙藤原
校閲・校正	濱田 美智子
表紙・装丁	株式会社 コンセント

『智場』は、国際大学グローバル・コミュニケーション・センター (GLOCOM) が発行している機関誌です。

「智場」は、「知識や意見の交換と流通の場」を意味する言葉です。

1995年に創刊され、情報社会学のフロンティアに挑み続けています。

©Center for Global Communications, International University of Japan, 2026.